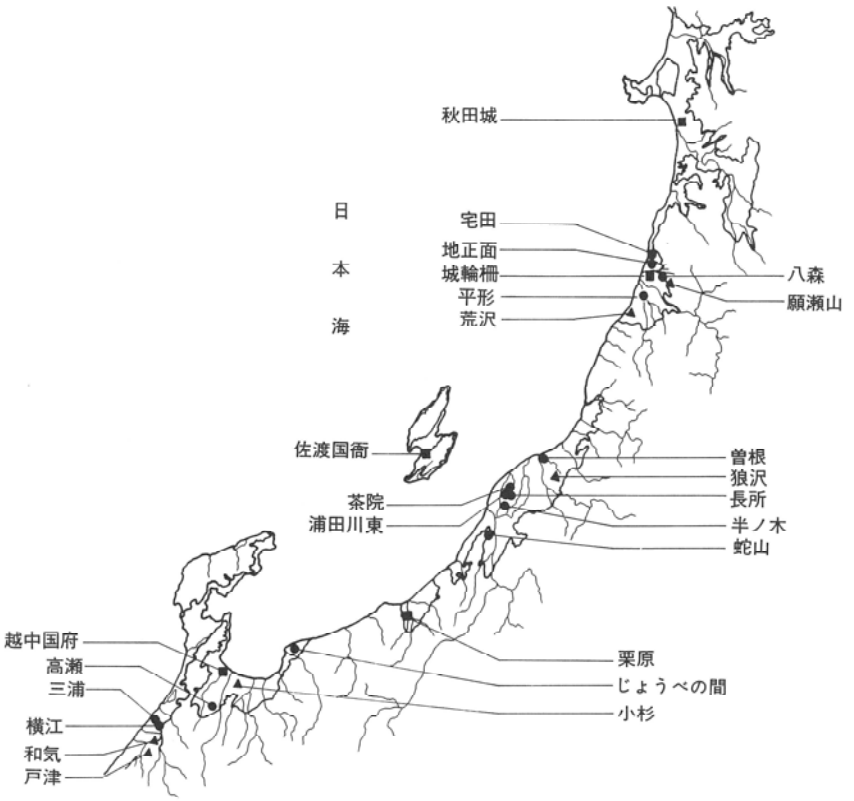

第36図　日本海沿岸の主要遺跡

とから，掘立柱建物の以前・以後とはいえ，時間的にはごく近接するものと判断せざるを得ない。

平安時代土器の研究と地域性

奈良・平安時代の土器研究では，集落跡における一括遺物を基礎とし，そのセットとしての把握が要求される一方，生産地・供給地としての窯跡の研究も集落跡での研究と有機的に関連付けられなければならないのは当然の事である。以下では，日本海沿岸地域における庄内とする立場から，北陸における近年の当該期研究の状況を概観し，本遺跡出土土器の年代的位置付けを考察する。

北陸における奈良・平安時代土器の編年的研究は，吉岡康暢氏の「加賀三浦遺跡の研究」(註—15)によってその基礎が築かれた。すなわち，同遺跡出土の土器を，出土層位により下層・中層・上層の三つに区分し，中層を奈良末〜平安初期，上層を平安後期として各位置付けるとともに，関連する窯跡・集落址出土の一括資料を加えた編年的研究の基礎が示されたのである。その後，富山県内においてほぼ同一時期に初期荘園に係わる荘所跡とされる高瀬遺跡・じょうべの間遺跡が調査され，舟崎久雄氏による富山県内の須恵器窯跡の編年的研究と，高瀬・じょうべの間両遺跡出土土器の編年的位置が考察された。すなわち，両遺跡出(註—16)

土土器は，「加賀三浦中層」と「同上層」の中間に位置し，なおかつ「三浦上層」より「同中層」に近く，その年代は9世紀代であるとする考えが示されたのである。また，巻末に収録された「北陸の荘園と両遺跡」では，「三浦上層」期についての年代観をめぐって，高島忠平氏等により，「9世紀～10世紀末」までの幅があるのではないかとする見解が出されるなど，その位置づけについての論議が活発化した。さらに，富山県立山古窯跡群出土須恵器をもととする藤田富士夫氏の5基の窯跡編年（8世紀末～10世紀初）もほぼ同期の研究成果である。その後の調査研究では，魚津市佐伯遺跡(註—17)における9C前半を主体とするとされた出土遺物や，小杉町・大門町，小杉流通業務団地内遺跡群(註—18)中の2号窯跡および竪穴住居跡出土遺物，さらに，断続的に継続されている入善町じょうべのま遺跡(註—19)の調査等が注目されている。しかし，以上の報文や論文の中では，本報告で用いているあかやき土器(註—20)とする概念ないしそれに近いものも見られず，すべて「土師器」として扱われている。但し，吉岡氏は，「須恵器と土師器の成形技法と煮沸形態の共通性，土師器にみる器種の著しい規格化，…中略…両工人集団が緊密な技術交流を通して接触しつつ生産性の向上をはかっていたと考察せざるを得ない。」あるいは，「北陸では須恵器のⅠ期後半の時期から，貯蔵と供膳形態は須恵器，煮沸形態は土師器(註—21)というふうに，はっきりと日常用器の中で機能分担がおこなわれている。その反面，須恵器の工人と埴輪ないし土師器の工人が緊密な技術交流を持続していたフシがある。」とする見解や「須恵器から土師器への転換も11世紀に急速に進行したのではなく9世紀(註—22)ごろから除々に展開していたということになれば…後略」とする部分等は，まさに筆者らのあやかき土器認識の出発点とも言えるものである。「11世紀…，9世紀…」(註—23)では，前者は，あかやき土器後半期における画期としての所謂須恵系土器の認識と一部共通し，後者はその出現期としての年代的妥当性があると考える。

一方，新潟県域におけるあかやき土器の認識についてみてみると，南中赤坂・南中五輪峠遺跡の報文中に千葉英一氏の論考(註—24)があり，おそらく初出であろう。細部では筆者らと見解を異にする部分が認められるが，あかやき土器の基本的な認識の点ではほぼ同一とすることができる。上記千葉氏の調査より3年前，1冊の興味深い報告書が中川成夫・川上貞雄・土井義夫の各氏により刊行されていた。笹神村狼沢窯址群の調査報告書である。そこで発掘された第2号窯跡（半地下式の登り窯）からは，「一見土師器質の一群」・「土師器のような焼成を示す一群」(註—25)の土器が窯床から出土したという。すなわち，大形甕，白色の大形甕底部，平底堝，丸底堝，ヘラミガキがある椀等である。こうした事実に対しては，「偶然の所産」と基本的には理解されており，「製品として流通していた可能性も考えられよう。」と結論づけられている。須恵器の機能上の形態は，供膳・貯蔵形態にある。煮沸形態の堝甕が，しかも一見土師器質（すなわち酸化焔焼成）で，さらに窯床から出土すると

いう事実は，北陸における平安期の土師器，本報告でいうあかやき土器の生産跡を理解する上で重要な意味をもつ。庄内地域の古代窯跡についても狼沢窯址と同様の現象が認められる事について，以前に若干触れた所があった。そこでの理解は，「あかやき土器の生産は，須恵器を焼成したと同じ登り窯を使用した。」(註—26)につきると思われる。しかし，曽根遺跡(註—27)の報文で家田順一郎氏が指摘するごとく，窯跡における須恵器とあかやき土器のあり方，およびその焼成の方法等実証的に解明されねばならない問題が多く残されている。また曽根遺跡報文は，新潟県下の最近の研究状況，成果を知る上で有意な指唆に富み評価される。

庄内の各地の遺跡からは，北陸文化の圏内としてもたらされた特徴的な遺物が時々認められる事がある。遊佐町地正面遺跡出土の双耳瓶等は，まさしく北陸特有の器種でありその形態からは，石川県河北郡高松町黒川2号窯式(註—28)9世紀前半代に比定される。降って12世紀後半から13世紀代には，多量の珠洲系陶器がもたらされる現象が近年明かにされている。(註—29)以上の研究状況を概観すると，庄内地域における平安時代遺跡の出土土器は，「総じて石川～秋田県の北部日本海地域の土器群と強い類似性を示し，山形県の内陸地域や太平洋岸の地域との共通性は少ない。平安時代の庄内の土器は『北部日本海沿岸土器文化圏』のなかで理解できる。」とする渋谷孝雄の見解に帰着するであろう。そこには，平安期の庄内（飽海平野）が，9世紀以降の新しい出羽国衙(註—30)として建置された「城輪柵遺跡」を中心とする一大フロンテア的性格を有する事，同時にそれを支えたのが北陸道諸国の文物であった事等々の歴史的背景とも強く結びつき(註—31)，その影響の一端を物語るものといえる。(註—32)

出土土器の年代とその前提

宅田遺跡出土の土器は，その出土状況（層位）から，Ⅰ～Ⅱ層とⅣ層，およびＳＫ７内出土土器群の三つのまとまりをもつ土器群として大別できた。しかし，製作技法・土器組成の比較検討の結果からは，三者の間に顕著な差異を見い出す事ができず，量的に保障される土器相互でもほとんど変化を見い出せなかった。すなわち，この三者には，時間的な先後関係は言えても土器型式として捉えられるだけの時間差がなく，極めて近接する時間の中で継起したものと判断された。(註—33)

種別の土器組成だけを見れば，あかやき土器がⅠ～Ⅱ層，Ⅳ層，ＳＫ７ともに90％以上となり，次いで土師器が４～８％，須恵器が１～３％の順で構成される。前述した地正面遺跡の９世紀前半と推定したＳＸ11では，須恵器50.2％，あかやき土器44.6％，土師器5.2％の組成率を示す。須恵器坏の底部切り離しが篦切り主体である関Ｂ遺跡(註—34)では，須恵器40.7％あかやき土器54.7％，土師器（黒色土器）3.5％，同じく回転糸切りが主体の茅針谷地遺跡(註—35)では，須恵器15.1％，あかやき土器78.8％，土師器（黒色土器）5.9％を各示す。また，竪穴住居跡を検出した上台遺跡(註—36)では，須恵器3.5％，あかやき土器67.7％，土師器24.4％とな(註—37)

り，坏類の切り離しは種別を問わず回転糸切りである。北田遺跡では，須恵器12%，あかやき土器82%，土師器６%で，須恵器坏類の切り離しは回転糸切りである。さらに，上ノ田遺跡のＳＤ401では，異時期のものが混在するとされるが，横瓶などの奈良時代まで遡り得る可能性ある一群の資料がある。(註—38)(註—39) 種別の土器組成を参考まで記せば，須恵器79.9%，あかやき土器18.2%，土師器（黒色土器）1.3%の組成比を示す。須恵器・高台付坏での底部切り離しは，平底坏で篦切りが84.5%，回転糸切り15.5%，高台付坏で篦切りが41%，回転糸切りが59%を占めるという。上記各遺跡とも全面発掘ではなくまた，同一性格とも考えられない事から一様の比較は多分に危険性をともなうが，全体的な流れとすれば，須恵器坏類での篦切り→回転糸切りへ，須恵器の日常什器に占める割合の減少とあかやき土器比率の増大，土師器の絶対量の減少といった傾向性は認めてよいだろう。

一方，器面に施される二次的な調整（回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ等）では，あるものからないものへの変遷が一般的には了解されるが，特に坏類での考察はされても，種別器種総体での技法分析は厳密にはなされていないのが現状である。タタキ技法一つだけを見ても，須恵器とあかやき土器ではその用法に差異を認め得ることは，本文中の製作技術の検討の項で明らかである。また，器種・器形的に古いと思われるもの（例えば横瓶の存在・長頸壺の肩部の張り出し。）ないし，堝・甕類の口縁部形態で簡素なものが一般に古く，複雑さを増すものが新しいといった観点も，厳密な形での論証はこれまでなされていない。従って，こうした状況を見た場合，これら土器群の絶対年代を積極的に根拠付けできるものが，北陸および庄内を含めて無いのが現状と言わねばならないし，一般的な年代判定の基準としているものについても，厳密な論証および十分な検証を受けたものでないとしなければならない。そこでは，種々の歴史的背景から導かれる相体的年代と，地域毎に集成された一括遺物等の先後関係および製作技術の検討，さらに周辺地域での編年と特殊遺物との言わば交差編年等にたよらざるを得ないのが現状であろうか。

以下では，宅田遺跡の年代を探るために，器種組成とその各形態的特徴の類似性，および技法面での共通性等の観点から，地域内での類似資料を抽出し，その相対的あり方に検討を加える。さらにその輪を北陸的視野にまで広げながらその相対的な年代を検討する。

土師器の内黒坏では，回転ヘラケズリ，手持ちヘリケズリを持つものがあり，遊佐町地正面遺跡に類似品がある（ＳＫ143・ＳＥ３）。また，甕では，同地正面遺跡（ＳＸ11），余目町上台遺跡他に若干例があるにすぎないが，宅田遺跡出土のものはより前者に近いと思われる。(註—40) あかやきの坏では，ＡＩ類としたやや小形で内湾気味に立ち上る坏と，高台付皿Ｂに類するものが同じく地正面遺跡（ＳＥ３）に各１点認められる。堝・甕・羽釜類では，地正面遺跡（ＳＫ４，その他），上台遺跡（ＳＴ２），境興野遺跡（Ⅲ層羽釜），願瀬山１号(註—41)

窯（堝口縁形態に類似品あり。）等に類似品が認められている。次に須恵器坏では，底部切り離し技法に，回転ヘラ切りと，回転糸切りとの２種がある。前者は，ＡＩ類にあたり，大きめの底部から直線的に外傾する口縁をもつもので器高は低い。後者は，小さめな底部から開き気味に立上る口縁をもつもので，いずれも地正面遺跡（ＳＸ11）に類似例を認める。(註—42)

高台付坏ＢＩａ・ＢＩｂ類では，遊佐町唐戸岩窯跡や同地正面遺跡（ＳＸ11）の一部に類似例を見い出すことができる。(註—43)

宅田遺跡では，以上検討した各種別の器種の他，須恵器では蓋・壺・横瓶と思われる破片資料等がある。しかし，全形が不明であり，他との比較は困難である。以上のような出土土器の類例の抽出を行った所，当初予測していた筆者らの心算とは裏腹に，従来から古い様相を持つとして９世紀後半～10世紀初めあるいは10世紀前半と位置付けがなされて来た地正面遺跡ＳＸ11やＳＥ３，および遺跡の主体的時期となる建物跡の時期に用いられたものと近似している事，また，上台遺跡にも類するものがある事等が言えそうである。上台遺跡については従来11世紀前半ないし，10世紀後半として位置付けられて来ているが，改めて白紙の状態から考え直すべき必要性を感じる。(註—44)(註—45)(註—46)筆者等は，吉岡氏の編年に照して地正面ＳＸ11出土土器については９世紀前半ないし中葉とする立場をとっている。ＳＥ３その他主体となる遺構の時期についても９世紀後半～10世紀前半と考えるのが妥当のように思っているのである。すなわち，黒川２号窯～小袋窯にかけての時期である。また，上台遺跡ＳＴ２の時期についても，10世紀前半～中葉までその位置を遡らせる事が可能ではないだろうか。(註—47)宅田遺跡の土器群はそうした意味では，地正面ＳＸ11よりは幾分新しく，遺跡の主体的時期（ＳＥ３を含む）により近いか同時期すなわち９世紀後半～10世紀前半代の年代が考えられる。とすれば，本来的には須恵器の占める割合もより高率である筈で，さもなければ，何らかの遺跡（地点）自体の性格が関与していると考えざるを得ない。また，年代的根拠の１つとして，須恵器坏類での形態と底部切り離し技法が上げられる。検討に耐え得るだけの十分な資料を得なかったが，やや大きめの底径に直線的に低く立上る口縁をもつものや，同高台付の存在，小さ目の底径から大きく開き気味に立上る口縁をもつ回転糸切りを示す坏等からは，坏類に回転糸切りが一般的に採り入れられた頃からそう遅くない時期（９世紀中葉～後半代）が考えられる。10世紀代では回転糸切りが主体をなすであろう。(註—48)以上，必らずしも十分な論証とは言えないが，現時点での筆者らの可能な見解を示し，宅田遺跡の年代について考えてみた。こうした年代観は，むろん，これからの調査研究の進展によっては流動する余地が多分に残されている事を最後に明記しておく。

遺跡・遺構については，調査が部分的でもあり，また，紙数も尽きた事から十分な検討

ができないが，建物跡については，柱間12尺等間で完数尺を示す事，柱穴の配例が整然としＳＢ２の規模がかなり大形である事などからは，近年明らかとなって来た平安期の庄内(註—49)における一般的な村落のあり方とは異なるものであろうと指摘するに止める。(註—50)

〈註・引用・参考文献〉

註—１　佐藤庄一・野尻　侃・安部　実（1982）「地正面遺跡・前田遺跡・塚田遺跡・佐渡遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第51集　山形県教育委員会

註—２　小野　忍　「城輪柵遺跡」『月刊考古学ジャーナル』１月号（199号）他

註—３　佐藤庄一氏等が考え出されたもので，「城輪柵遺跡」周辺遺跡で検出される道路跡などの断片的な資料と，相対的な遺跡位置と城輪柵遺跡からの距離によっているとの御教示を受けた。

註—４　小野　忍氏の考えで，条里関連地名（「…目」の付く地名）と古代尺の検討から109mを基準にするのではないかとの御教示を受けた。

註—５　佐藤庄一・野尻侃・安部　実（1982）「北田遺跡第２次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第53集，Ｐ45，表—２「庄内地方井戸跡出土例一覧」他

註—６　１に同じ。　佐藤庄一他（1982）

註—７　渋谷孝雄他（1978）「東田川郡藤島町平形遺跡第７次発掘調査現地説明会資料」山形県教育委員会・藤島町教育委員会

註—８　1979年，分布調査のおり現地を踏査，後に，農道工事により破壊された灰原部分から出土したと思われる須恵器片多数を，庄内教育事務所埋蔵文化財調査室で安部実氏らの御好意で実見する機会を得た。

註—９　1978年，窯跡出土のあかやき土器煮沸形態（鍋・甕類）の探査中，致道博物館に所蔵されている遊佐町唐戸岩窯跡出土の須恵器を酒井忠一・酒井英一氏の御好意で実見・実測させていただく機会を得た。

註—10　結果・現象としての「あかやき土器」・「赤焼き土器」の認識はより一般的になってきたものの，製作技術や体系，工人と生産跡といった問題追求と認識は意外と行われていないのが現状である。

註—11　あかやき土器の定義については，煮沸形態の土器を中心に不十分ながら行った事がある。阿部明彦(1979)「山形県余目町上台遺跡の竪穴住居跡と出土土器について」Ｐ44　５，—あかやき土器について—『庄内考古学第16号』

註—12　あかやき土器の製作体系については，明確に検証されてはいない。ここでは，平安時代初期ないし，それ以前（奈良時代）の須恵器製作技法から派生し，平安時代を通じて独自の体系を確立するとの見通しを立てている。その根拠は，あかやき土器の技術的検討と須恵器製作技法との比較，登り窯出土の煮沸形態の土器等があげられよう，今後，家田（1982）が指摘したように，窯跡におけるあり方を吟味・検証しなければならない。

註—13　小笠原好彦（1976）「東北地方における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』

註—14　吉岡康暢（1967）「遺物」「土器の編年的考察」Ｐ44他『加賀三浦遺跡の研究』

註—15　14に同じ。

註—16　高島忠平・橋本正・舟崎久雄（1974）「井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書」富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

註—17　藤田富士夫（1974）「富山県立山古窯跡群」『考古学ジャーナル』７月号，№97

註—18　橋本正・上野章・山本正敏・池野正男・松本幸治（1980）「富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要」富山県教育委員会

註—19　吉岡康暢（1965）「石川県河北郡黒川第２号窯址」『日本考古学年報』13他，

註—20　橋本正・岸本雅敏（1975）「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要（３）」入善町教育委員会
神保孝造・奥村吉信（1981）「入善町じょうべのま遺跡予備調査概要（４）」入善町教育委員会
岸本雅敏・山本正敏・松島吉信（1982）「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報（５）」入善町教育委員会

註—21・22・23　16に同じ。

註—24　千葉英一・金子拓男（1977）「県営前谷圃場整備地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書— 南中赤坂遺跡・南中五輪峠遺跡・飯田五輪峠遺跡」下田村教育委員会

註—25　土井義夫・中川成夫・川上貞雄（1973）「新潟県北蒲原郡笹神村狼沢窯址群の調査」立教大学文学部考古学研究室調査報告１　立教大学文学部考古学研究室

註—26　阿部明彦（1979），川崎利夫（1979）「酒田市願瀬山１号窯の須恵器」『さあべい』第３巻・第２号

註—27　家田順一郎（1982）「豊浦町文化財報告（四）曽根遺跡Ⅱ」新潟県豊浦町教育委員会

註—28　佐藤庄一他（1982），阿部明彦他（1978）「地正面遺跡発掘調査説明会資料」山形県教育委員会

註—29　19に同じ。吉岡康暢（1965）他

註—30　佐藤禎宏（1980）「最上川流域出土の珠洲系陶器」『庄内考古学』第17号他

註—31　７に同じ。渋谷孝雄他（1978）
川崎利夫・野尻侃・長橋至（1980）「平形遺跡・周辺遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第26集　山形県教育委員会

註—32　阿部明彦他（1978）「地正面遺跡発掘調査説明会資料」山形県教育委員会
川崎利夫（1980）「城輪柵周辺の諸遺跡—最近の発掘調査から—」『羽陽文化』112号
伊藤博幸（1980）「胆沢城と古代村落—自然村落と計画村落—」『日本史研究215号』

註—33　平川　南（1977）「出羽国府論」『研究紀要Ⅳ』多賀城調査研究所

註—34　１に同じ。佐藤庄一他（1982）

註—35　川崎利夫・野尻侃・安部実（1981）「関Ｂ遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第47集　山形県教育委員会

註—36　川崎利夫・野尻侃・安部実（1981）「茅針谷地遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第49集　山形県教育委員会

註—37　名和達朗（1978）「上台遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書第14集』山形県教育委員会

註—38　佐藤庄一・野尻侃・安部実（1982）「北田遺跡第２次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第53集　山形県教育委員会

註—39　佐藤庄一・野尻侃・安部実（1982）「上ノ田遺跡」『農林・土木事業関係遺跡発掘調査報告』山形県埋蔵文化財調査報告書第52集　山形県教育委員会

註—40　佐藤庄一・野尻侃・安部実（1983）「後田遺跡」『農林事業関係遺跡（２）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第64集　山形県教育委員会

註—41　川崎利夫・野尻侃・安部実（1981）「境興野遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第46集　山形県教育委員会

註—42　佐藤禎宏・佐藤潤子（1971）「酒田市願瀬山第４号窯跡」『山形史学研究』第７号—柏倉亮吉教授退官記念特集—。川崎利夫（1979）

註—43　９に同じ。

註—44　あかやき土器が，Ⅰ～Ⅲ層，Ⅳ層，ＳＫ７ともに，遺物土器中に占める割合が90％以上あった事から，当初平安後期かと考えていた。整理が進むにつれて，古い様相を持つ事が判明したのである。

註—45　佐藤庄一（1979）「山形県における土器様相（予察）」『庄内考古学』第16号

註—46　11に同じ。阿部明彦（1979）

註—47　小嶋芳孝（1975）「金沢市未町附近の窯跡群とその歴史的性格」『石川県考古学研究会誌』第18号

註—48　14に同じ。吉岡康暢（１９６７）Ｐ47～48に依った。

註—49　宮本長二郎（1974）「北陸の荘園と両遺跡」Ｐ108　高嶋忠平編（1974）所収

註—50　阿部義平（1978）「古代出羽の発掘調査—堂の前遺跡とその周辺—」『日本歴史』８月号他